

## 母愁の秋

環 真 砂 緒 子

自ら身をせばめせばめて  
こんなにも双肩に食入る重圧に一日の  
安息とてない私の傷心に秋は大波の如  
うねりうねり纏れた母愁を打寄する

母よ、唯一條の歪んだ感情に、まだこんな  
にも私の心は見果てぬ蒼穹の真唯中に  
的度もなく浮遊する風船玉だ  
涙と共に、只管に湧出する悔情は  
描き損ねてはずたずたに画布を断切る

画家の焦心こころだ

ああだが母よ……  
ひしひしと用赦なく双肩に喰入るこの重圧を  
支へ、道標を尋ねてさ迷い疲れ切った  
この足は腐敗した大根のようだ  
歩き出せばぼろぼろに崩れるこの足……  
血苦笑慟哭しつ……  
こころの螺せん階段を上り詰めるのは  
ああ、いつの日か……

追憶の秋は今日も怒濤の如く歪んだ  
廃船を洗ひ、貝殻は幼時の子守唄を  
吐いては飲み、吐いては飲み  
尖、尖、母の情感を運ぶ。

「山桜」昭和九年九月号  
( 詩 )